UR都市機構の情報誌●ユーアールプレス
UR PRESS
2012 vol.29
震災復興特集号

CONTENTS

01 復興へ向かうまちへ、人の声を届けよう。
写真家　立木義浩

03 Special Interview
建築家 坂 茂
紙を素材にアイデアを凝らし
避難所、仮設住宅に「快適さ」を

詩人 和合亮一
被災地の思いを発信し続け、
共感を広げる「言葉の力」

10 特集 東北に響く、復興の槌音

11 URの復興支援

13 女川
地域に寄り添った、
真の復興支援を

17 町長が語る「女川の未来」

19 陸前高田
すべては故郷のために、
その一心で

21 大槌
まちづくりのプロとして
第一線で支援したい

23 塩竈
新たな生活の舞台に
多くの思いを込めて

26 URからのお知らせ
編集後記

表紙写真 = 立木義浩
崩壊を免れた家屋の前で津波を食い止めたかに見える
けなげな桜
（2011年4月28日、宮城県気仙沼市）

巻頭言

復興へ向かうまちへ、人の声を届けよう。

写真家
立木義浩――文と写真

津波で大破した防潮堤を臨む海岸で（岩手県宮古市田老町）

２０１１年３月11日、東日本を襲った大地震、そして大津波。この未曾有の災害は、私たちに〝革命〟とも呼ぶべき変化を起こした。

〝革命〟といっても、手に手に石を持ち騒ぎ立てる類のものではない。一人一人の心の中で、静かに、しかし確実に進行していく変化のうねりだ。

例えば一枚の風景写真がある。以前には、「ただ美しいだけの平凡な景色」に見えていたものが、ある一瞬を境に、「二度と目にすることができない特別な光景」に変わる。大災害に遭遇するとは、まさに、そういうことなのだ。

震災の８日後から、時間と、ガソリンの許す限り被災地を訪れてきた。４月末、気仙沼の高台に辛うじて残った民宿へ泊まったときだった。街灯の消えた暗闇を走って宿に着いたため、翌朝になって窓から見た気仙沼の風景に思わず息をのんだ。ざっくりと根こそぎ奪われた日常。波の音だけで、生活の音がまったくしない。この無音のまちで、大きな喪失感を抱え、生きていく人たちのことを思った。

復興は、これから長い道のりになるだろう。個人で出来ることなどわずかに過ぎない。しかし世界は些事の積み重ねでしか動かないものだ。私は被災地に行き、写真を撮り、夜は人と酒を酌み交わして語らう。「津波の後で、ワカメが大漁だ」「海もちょっとは悪いことしたと思ってるのかね」。そんなさりげないやり取りでも、「にぎやかになってうれしい」と言ってくれる人がいる限り、私は東北を訪れたい。

季節が巡れば、花はまた咲く。子どもたちは海で遊ぶ。自然の営みが営々と続くように、人間も暮らしを築いていこう。一日一日を、この一瞬を、何より愛しく大切なものと感じられる〝心の革命〟を続けながら。

Yoshihiro Tatsuki

1937年徳島県徳島市生まれ。実家は、NHK朝の連続テレビ小説『なっちゃんの写真館』のモデルとなった立木写真館。東京写真短期大学（現・東京工芸大学）卒業。女優写真の第一人者として知られ、広告・出版・映像など幅広い分野で活躍。1995年の阪神・淡路大震災で被災地を取材撮影。2011年東日本大震災の被災地にも足繁く通い、復興に尽力する。